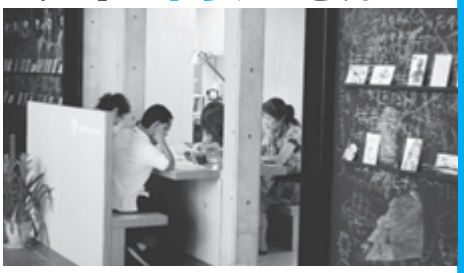
アトリエ インカーブ ワークルームにて（写真提供:アトリエ インカーブ）

「社会福祉法人 素王会
アトリエインカーブ」
理事長・施設長
今中（いまなか） 博之（ひろし）さん



プロフィール

1963年、京都府生まれ。86年、（株）乃村工藝社デザイン部入社。96年、大阪市リハビリテーション市民講座企画委員。02年には社会福祉法人素王（そおう）会理事長就任。03年、乃村工藝社を退社し、アトリエインカーブ施設長となる。主な設計作品にアトリエインカーブ、尼崎市立すこやかプラザ・すこやかすまい体験館ほか。受賞は通産省グッドデザイン賞（96年）など。01年からは、積極的に講演依頼もこなしている。大阪市在住。一級建築士。

知的障害者のフォルムやカラーに、オリジナルを感じますね

大阪市南部に位置する平野区の大和川近く。水田風景が残る一角に、「アトリエインカーブ」という名の知的障害者通所授産施設がある。オープンは昨年4月。活動の中心をデザインやアートに特化した国内初の授産施設として、テレビや新聞にも大きく取り上げられている。このアトリエインカーブの施設長であり、運営主体の社会福祉法人素王会（そおうかい）の理事長が、自身も障害者の今中博之さんである。

アトリエインカーブに通う知的障害者はクライアント（お客様）と呼ばれ、現在18人。全員がプロのアーティストやデザイナーを目指しており、指導するスタッフは、今中さんを含め一流のアーティストやデザイナーだ。彼らが学びつつ制作するのは版画や木工、金工からCGまで幅広い。中には、既にプロの目に耐えられる作品も生まれている。

今中さんは、京都生まれの姫路市育ち。大阪の大学に入学のため単身で来阪し、以来大阪暮らしを続けている。デザインに関心を持ち始めたのは、中学3年生のころ。20世紀を代表するデザイナーで、ピースたばこの鳩のデザインでも知られるレイモンド・ローウェイさんの本「口紅から機関車まで」と出合ってからだ。

「小さなものから機関車のような大きなものまで、デザイナーの仕事の幅広さに魅力を感じた」が、それよりも「文章の中に『座ってする仕事が多い』と書いてあったんです。もう、将来の仕事はこれやと（笑）」。生まれつき関節の軟骨がうまく成長しないという障害に見舞われ「歩き回る事が困難だった」という中での選択だった。

就職した会社では、主に空間デザインを担当。一方で近年は1級建築事務所を持ち、バリアフリーのレストランやショップを設計。土曜日曜を利用して、デザイナーやアーティストを目指す障害者のための福祉作業所「アトリエ万代倉庫」を開設していた。アトリエインカーブは、会社と建築事務所、福祉作業所の業務を一体化した“夢の施設”と言える。

現在は施設長としても多忙だが、朝の筋肉トレーニングと、300メートルの水泳は欠かせない日課だ。「アメリカで教えてもらったリハビリです。これをやらないと10年ぐらいでベッド行き（笑）」と明るく答えるが、強い精神力を求められるリハビリである事は、予想できる。

ところで、開設1年の成果は、商品として大阪港区の＜サントリーミュージアム天保山＞で発売されている。カバン、Tシャツ、アクセサリーなどプレゼント向けの9品種。ミュージアムで、社会福祉法人がショップ展開するのは、日本でも前例が無い。しかも、売り場のどこをみても「障害者」や「福祉」の文字は見当たらない。「お涙頂戴ではない福祉を」という運営方針の現れである。

来春には、米国での作品展も計画されている。米国を選んだのは、「『知的障害』の文字を外して作品を評価してもらいたい」ためだ。そんな思いを込めて「知的障害者の出すフォルムやカラーに、私には出せないオリジナルを感じるのです」と語る今中さんに、関係者の期待は大きい。

（文・脇本勤／写真・高島悠介）

［編注］アトリエインカーブのHPは http://www.soohkai.com